

1. 豪農の長男

読書・剣術・家業の手伝い

渋沢家は通称「^{なか}中の家」と呼ばれる豪農で、父の市郎右衛門は名主見習として岡部藩から苗字帯刀を許されていきました。

同家は農業の傍ら藍玉販売や養蚕を手がけており、少年時代の栄一も家業を手伝い、工夫を凝らして商才を発揮したといえます。

また従兄の尾高^{おんたか}惇忠から『論語』をはじめ四書五経を学び、従兄の渋沢新三郎から神道無念流剣術も学んでいました。

17歳の頃、藩からの理不尽な御用金賦課に憤りを覚え、武士支配への反感と国政参与への大望を抱くようになります。

